２０２３年7月３０日　Ｎｏ.３６７８

先週の講壇から　　〝互いに畏れをもって〟

エフェソの信徒への手紙 第5章21節～32節

聖句「キリストに対する畏れをもって、互いに仕え合いなさい。妻たちよ、主に仕えるように、自分の夫に仕えなさい。」(5:21)

１．《夫と妻》　日本基督教団の「口語式文」(1959年）では、結婚に際して「夫に対する教え」「妻に対する教え」が読まれます。妻に対しては「夫は妻の頭」だから「すべての面で夫に仕えるべき」、夫に対しては「妻を愛しなさい」と勧められています。典型的な「二重規範」です。当時、女性は男性に従い仕える役割でしかありませんでした。「エフェソ書」5章から6章にかけては「妻、子供、奴隷」と、庇護を必要とする存在について述べられている箇所だったのです。

２．《性差別》　「仕えること」よりも「愛すること」の方が難しい。男性に対してより厳しいことが要求されているのだ、と説かれた牧師も居られました。しかし、そうすると、女性は男性ほどに高度な要求を受け止められない存在だと主張するに等しいのです。何しろ2千年前の文書です。現代と比較にならない程に、女性の地位は低かったのです。実際、結婚前、娘は父親の所有物、結婚後、妻は夫の所有物でした。「仕えること」も徹底すれば「愛すること」に成ると主張する牧師もいますが、ここに言う「愛すること」は「弱い立場にある女を守ってやること」、「仕えること」は「夫に絶対服従すること」でしかありません。それ故、2006年の「式文／試用版」は、この箇所は外されているのです。

３．《畏れを》　この文書は奴隷制度も含めて、当時の社会制度や意識が色濃く反映されています。パウロも時代の子ですから、時代の限界を乗り越えられる訳ではありません。それでも、現代に生きる私たちが傾聴するに値する御言葉はあります。「畏れをもって、互いに仕え合いなさい」です。「恐怖」ではなく「キリストに対する畏れ」です。イエスさまの御姿です。主は世の権力や支配に従属するのではなく、御自ら人々に仕えられました。差別される人、見下されている人たちをも尊ばれたのです。この「畏れ」をもって互いに接する時、役割の違いや立場の上下、長年の馴れ合いを乗り越えて、そこに新しい出会いが生まれるのです。固有の人生を神から与えられた別の人格として尊重することが出来るのです。かつてキリスト信者を「神を畏れる人たち」と称した時代があったのです。

朝日研一朗牧師